INTERVIEW
教授に聴く
研究

ミャンマーへの医療支援
―帰国した留学生の想いに応えて―

■ プロフィール

大学院医歯学総合研究科
細胞機能講座分子細胞病理学分野
内藤　眞 教授
NAITO Makoto

専門分野：病理学
研究課題：①マクロファージの発生分化と生体防御機構
②動脈硬化の病理

医学博士。1947年生まれ。1972年3月福島県立医科大学医学部卒業、1976年3月同大学大学院医学研究科博士課程修了。1984年4月～1988年10月熊本大学講師、1988年11月～1992年10月同大学助教授、1992年10月新潟大学教授就任。新潟県特定疾患協議会委員、日本病理学会（評議員）、日本リンパ網内系学会（理事）、動脈硬化学会に所属。2002年「ミャンマーの医療を支援する会」を設立。現在代表を務める。

いろんなものを届ける国際宅急便のようなことをしています。

――内藤先生の専門分野について、具体的にはどんな研究をしていらっしゃるのですか？

病理学といって、例えば胃がんの手術をしたときにその胃がありますね。それを標本にして、顕微鏡で見て、どういうタイプのがんで、どこまで広がったかということを診断します。また、病気で亡くなった方を解剖して、病気がどういうふうに広がっていたとか、そういうことを調べるのを人体病理といいます。人間の病気を直接扱う分野です。病院の中にも病理部があります。私はそれに加えて動物実験などもやっています。

――内藤先生が「NGOミャンマーの医療を支援する会」を立ち上げた経緯は？

今から9年前、ミャンマーから1人の留学生がやってきました。彼女の名前はヤデナ・キャウ。4年間の在学期間を終え、帰国後首都ヤンゴンで医師として働いていた彼女から何度か手紙をもらい、ミャンマーの劣悪な医療事情を知りました。ちょうどその頃、国際医療協力事業にたまたま参加しまして、その一員としてヤデナ医師が働いているヤンゴンを訪れました。現地であまりにもひどい医療状況を目の当たりにし、その中で非常に苦労しているヤデナ医師を見まして、少しでも何かできないかなと思いました。

初めは、私の研究費で試薬を持参し、検査技術指導を行っていましたが、研究費が切れ、その後の活動を思案していたら、ヤデナさんが在日中に知り合った津川の新善寺の畠山住職が働きかけて

➡いつでも出発できるように教授室に備えてあるスーツケース。

⬆何もない病室で結核患者を診察するヤデナ医師。新潟との絆は彼女の支えとなっている。

➡支援物質を満載したスーツケースを前にしたスタッフとボランティア。（成田空港　2003年9月2日発）

くださり、京都の仏教クラブから100万円の寄付金をいただいたんです。それで、我々が降りるわけにはいかないと思い、心を決めて「ミャンマーの医療を支援する会」を立ち上げたのです。

――「ミャンマーの医療を支援する会」とは、どんなことをしていらっしゃるのですか？

一言で言いますと、いろんなものを届ける国際宅急便のようなことをしています。具体的には、結核の薬や試薬品、顕微鏡やデジタル体温計などの医療器具をヤデナさんの勤務する病院に届けています。やはり、自分たちが直接持っていくのが一番確実ですからね。

――1回の渡航では大体何日間ぐらい滞在されていますか？

5、6日です。我々が行ってやれることは、とにかくものを運ぶことと、講習会をやることです。実際の診療をやるのは彼女をはじめ現地の医師ですので、みんなが必要なものを託して帰ってきます。一往復すると1人20何万かかりますので、4人で行けば100万円飛ぶわけですね。それに見合うだけのものを持っていかなければ効果が少なくなってしまいます。

最近気がついたのは医学書が不足していることです。日本でも医学書は高いですけど、あちらでは目の飛び出すような値段になるわけですね。それで英語の医学書を少しずつ持っていくようにしたのですが、またこれがこんな分厚くて重いんですよ。

――学生相手に講義などの活動はなされているんですか？

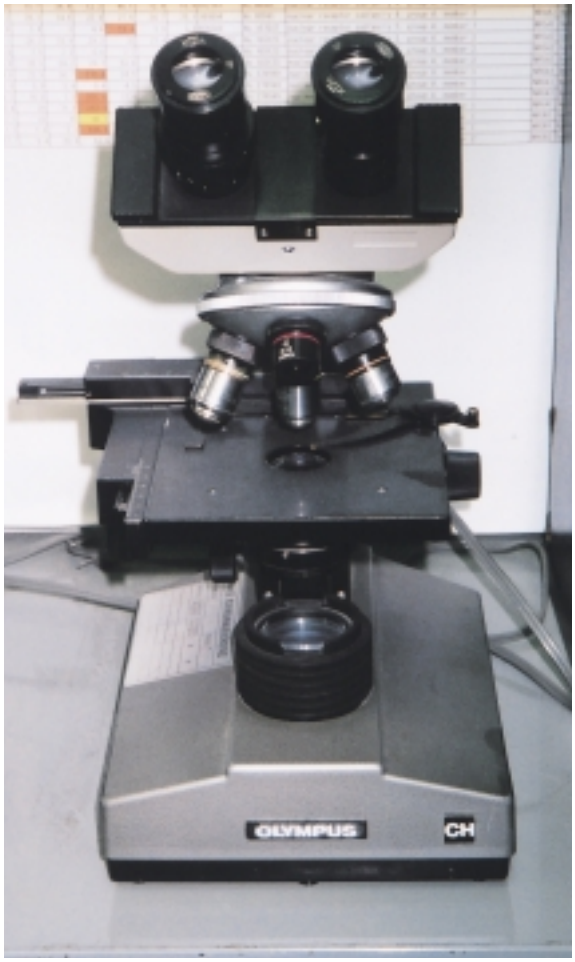
これからやってみようかなと思っています。向こうの医科大学というのは全国で4つしかないんです。1学年は日本では100人ですよね。医者も看護師も増やそうというので、それが500人になっていて、講義はいいけれども実習はほとんどできないみたいですね。ですから我々が持ってい

我々が行ってやれることは、とにかくものを運ぶことと、講習会をやることです。

⬅結核菌を観察する検査技師。単眼の古い顕微鏡が唯一の頼り。

支援してくださる人たちの気持ちをお届けすることも大事なことだと思っています。

⬇払い下げられた医学部の実習顕微鏡。手入れをし、変圧器、予備電球を添えてヤンゴン大学医学部へ10台寄贈。すべて手持ちで運んだ。



った顕微鏡も学生実習というよりは、学生の試験のために使っていると聞きました。

――新潟大学の医学部の学生は、向こうへ同行されていらっしゃいますか？

その機会はまだありません。自分で行きたいと言うんだったらいいんですが、そこまでこちらは負担できませんので。自分で渡航費や滞在費を負担して、一緒についてくるというんだったら喜んで連れて行きますよ。

――内藤先生たちの活動への支援やサポートはあるのですか？

日本の製薬メーカーにお願いして数社から100人分の結核の薬や抗生物質を頂いて、それをミャンマーに運びました。企業は、確実に責任あるシステムで届けていくことがわかれば協力してくれます。抗結核剤なんかは全部ただでもらって、持っていくわけですから、私たち国際宅急便がどれだけ信頼されるかどうかは大きいですね。

先ほどの京都の仏教クラブの寄付もそうです。また、昨年、私たちの活動がテレビに放映されて以来、10数口の寄付をいただきました。毎月3000円を送ってくれる新潟市内のおばあちゃんもいます。そういう人たちの気持ちをお届けすることも大事なことだと思っています。

――ミャンマーの医療現場の現状は？

一番の問題は、結核なんですよ。結核患者が野放しになっていて、十分な治療を受けていないという状況で、結核の感染の機会がとても高いのです。病院の中で医療関係者まで感染するという現状です。医療関係者も認識はしているのですが、マスクや手袋などが非常に不足しているのです。

また、電力事情が非常に悪いです。病院でもし

⬇ヤデナ医師の働くサンピュア総合病院（ヤンゴン市）。きれいな草花が咲き誇る庭とは対照的に外壁はカビだらけ、下水は垂れ流し。

大学院医歯学総合研究科
内藤　眞教授

大きいことをやるのではなくて、小さいことを長く続けることを大事なこととしてやっていきたい。

ょっちゅう停電します。私たちが集めた検体なども冷凍庫に保存していたのですが、2日間停電で止まってしまい、だめになってしまいました。断水もありますし、社会インフラが悪いので、設備が整っていません。患者さんは、病院に行って診察までは無料なんですが、薬は各自購入するということで薬が買えない人が多いのです。そういうのが大きな問題ですね。

――ミャンマーの医療支援で大事なところは何ですか？

感染症に対する検査と、治療に対する支援です。今のところ直接ものを持っていくという仕事ですが、本当はもう少し細菌学や内科の専門家が一緒になって検査や研究などもできればいいなという点と、ある程度大規模な設備を備えられるようにしてあげられればいいなという点です。設備投資までは我々はできませんから何らかのチャンスをねらうしかありません。

――今後のミャンマーへの医療支援の展望はありますか？

ミャンマーの医療の現状を見たり、活動を通して、研究成果をまとめたいと考えています。

何らかの研究成果を出したいという一番の理由は、昨年とることのできた科学研究費を続けて取得して、活動を続けたいという気があるからです。支援活動と研究活動を通じてミャンマーの医療に貢献したいですね。

大きいプロジェクトですと、3年とか5年とかで切りますよね。後は現地の人たちの自立を促します。でも基盤が弱いので大抵自立できないんですよ。だから僕らは大きいことをやるのではなくて、小さいことを長く続けることを一番の目標というか、大事なこととしてやっていこうと思っています。

⬇ミャンマーの医療を支援する会（JAPHM）
http://www.med.niigata-u.ac.jp/pa2/welcome.html